

# 愛知北米移民の研究（Ⅱ）

—ウォーナツグローブ「北米の愛知村」—

筒井 正

## はじめに

今日までの移民研究は、移民の契機や実態、国を離れるまでの送出国過程もしくは、ホスト社会への定住過程に関する研究が主であり、従って移民史の半分しか描かれていない。この背景には、言語の障壁や資料的制約、さらには太平洋戦争で日本町や日系コミュニティーが崩壊したことなどにより移民研究の難しさがあると考えられる。

筆者は、本誌前号において明治から大正期にかけて急増する愛知の北米移民について、特に移民多出地域である海部・津島地域を中心として、移民の契機と実態、移民が地域経済に及ぼした影響、出移民の要因分析を行った<sup>(註1)</sup>。

本論の目的は、カリフォルニア州北部のサクラメント河下流域のデルタ地帯で、かつて「北米の愛知村」と呼ばれていたウォーナツグローブを中心に、愛知北米移民の定住過程を明らかにすることにある。

前号で明らかにした海部・津島地域を中心として明治から大正期における北米移民の送出国過程と本論による「北米の愛知村」での定住過程を明らかにすることによって、移住過程の一つのモデルケースを提示できるものとする。

## I. ウォーナツグローブの地理的位置

ローキー山脈に降った雪は、春になると河川を増水させアメリカン河、サクラメント河、サンウォーキン河などの大河を下ってサンフランシスコ湾に流れ込む。カリフォルニア州の州都サクラメントでアメリカン河とサクラメント河が合流し、



このサクラメント河の下流域で、コートランド・ウォーナツグローブ・アイルトンの地域をダウン・リバーと呼び、同地に入植した日本人移民がこのデルタ地帯を河下地域と呼んで一般化した。ウォーナツグローブは、サクラメントからサクラメント河に沿って約30マイル下流に位置しており、河下地域の農業の中心地として発達し、アスパラガス・ビーンズ・馬鈴薯・玉葱などの野菜や洋梨・ぶどうなど果実栽培が盛んである。

ウォーナツグローブへの最初の入植者はニューヨーク出身の John. W. Sharp である。Sharp 一家は、ゴールドラッシュが始まった1850年春に入植し、160エーカーを開墾し農業を始めた。東海岸からの白人入植者が相次ぎ、ウォーナツグローブの町が誕生した。この背景には、合衆国政府やカリフォルニア州政府が、東海岸からの新移住者に対して、開墾した者はその土地の所有者になれるという政策を推進したことがあげられる<sup>(註2)</sup>。

河下地域はしばしば河川の氾濫に悩まされたが、しかし、氾濫の後は土質が肥沃となり、肥料を使用しなくても農作物が豊富に収穫できた。ウォーナツグローブの周辺で開拓が進んだのは19世紀の後半以降である。ユニオン・セントラル鉄道の敷設工事に雇用されていた多数の中国人移民は、鉄道の完成とともに解雇され、新たな仕事を求めてデルタ地帯に入った。サクラメント河のデルタ地帯の未開地を開拓したのは中国人移民であった。

中国人移民の増加によってチャイナタウンが成立し、1882年に中国人排斥法が制定されるまで、ウォーナツグローブは白人と中国人の町として発達した。

## Ⅱ. 鶴見藤四郎の入植

ウォーナツグローブへの日本人の入植は、1889年東京出身の石坂公歴が日本人移民50名ほどを率いて、ウォーナツグローブの東3.8マイルに位置するニューホープでハップス摘取に従事したのが最初である<sup>(註3)</sup>。

愛知県人で初めてウォーナツグローブに入植したのは、愛知北米移民のパイオニア山田芳男の勧誘によって渡米した鶴見藤四郎である。鶴見は山田芳男の斡旋により、ウォーナツグローブ北方7.3マイルに位置するラックのホントン農園に

搾乳ボーイとして就労した。鶴見は「資性着実勤勉」で他人に対して親切であり、農園主の信用を得、また近隣の白人にもその顔を知られるようになり、白人地主は鶴見に日本人労働者の斡旋を依頼するようになった。この結果、鶴見の斡旋により愛知県出身者が多数ウォーナツグローブで就労するようになった<sup>(註4)</sup>。

1894年には、梶田庄太郎（八開）が、海部郡に隣接する中島郡の平和町や祖父江町の出身者ら17名を率いて河下地域に入り、800エーカーの農地を請負耕作し、徐々に耕作規模の拡大をはかり、日本人移民100人程を雇い、このうち約70名が愛知県出身者であった。同じころ、若山栄次郎（佐織）は同県人15名を率いてグランド島に入り請負耕作を行っている。1896年、山岡松次郎（佐織）をボスとして山田竹次郎・山田千松らがタイラー島のボーマン農園に入り、豆や馬鈴薯の栽培に従事した。翌1897年には若山栄次郎・宇佐美源左衛門・鈴木徳三郎・若山竹次郎・若山角三郎・伊藤鞍吉・八木彦四郎・竹田寅吉・若山竹三郎らの海部・津島出身者が相次いでボーマン農園に入り農業労働に従事した。一方、堀田鎌次郎（佐織）は太田正芳と共同で109名の日本人労働者を引率してコンコード郡テラス鉾山に職を得ている。このうち35名は愛知県人であった<sup>(註5)</sup>。

### Ⅲ. 移民の展開と定着

愛知から北米移民が始まった1880年代は、山田の勧誘や移民した人の呼び寄せなど言わば知人や親類・縁者が移民の大部分を占めていた。移民した当初は、キャンプ（農場）からキャンプへと仕事を求めて渡り歩く季節労働者として就労した。彼らは、毛布（ブランケット）1枚と柳行李に入った身の回り品を担いで渡り歩くので、一般にブランケ担ぎと呼ばれていた。

ブランケ担ぎは何ら自己資本を必要とせず、キャンプでの生活は宿泊費もいらず労働に勤しんだ。しかし、この過程で農作業の技術を習得し、なかには数年の間にある程度の資金をためて、自ら土地を借地して独立した農場主となり同郷の人を労働者として雇う者も現れた。

河下デルタ地帯における労働市場においては、ボスシステムと呼ばれる労働契約システムが機能していた。ボス（日本人農場主で雇用主）とブランケ担ぎ、そ

してこの両者の間を邦人旅館が仲介して職業の斡旋を行っていた。ボスは労働者を必要とするとき、旅館のオーナーに労働者斡旋を依頼する。旅館のオーナーは宿泊客に対し就業先を斡旋する。このとき、相互の間に金銭の授受は伴わない。このボスと旅館のオーナー、そして宿泊客の関係を持続させている基礎には、出身地が同じであるという同郷人としての連帯意識が強く働いていたと考えられ、旅館名には愛知旅館や熊本旅館など出身県名を冠したものが多く見られた<sup>(注6)</sup>。

移民の展開過程は、このブランク担ぎの段階から収穫分配の段階に移行する。収穫分配は、地主から土地を借りて耕作を行い、収穫に際して収穫物を地主と耕作者とで分配する方法で、農具・農耕馬・種など一切の農業に必用な道具類は地主が負担した。従って、収穫期に至るまでの生活費があれば収穫分配耕作を始めることが可能であった。1891年鶴見藤四郎が河下のグランド島において530エーカーの土地を収穫物の7分が地主、3分が小作人という契約により借地して豆類を耕作したのが愛知県出身者による収穫分配の最初である。

資本を蓄えた移民の次のステップは、現金借地による農場経営である。現金借地は、借地人が地主との間で土地貸借契約を結び一定の地代を支払う。地代の支払いは、契約時に全額を支払う方法、分割で支払う方法、収穫後に一括して支払う方法などがある。借地料は、その土地の地味などの土地条件によって差異がみられ、1900年代において1年1エーカーあたり、最も高い場合で30ドル、最も低い場合5ドル50セント、概ね15～20ドルであった<sup>(注7)</sup>。

愛知県人で、現金借地の先駆けは浅井健次郎(八開)である。浅井は1898年、伊藤要次郎(佐織)ら青年数名を引率してサンウォーキン河流域のバイロンにて250エーカーの土地を現金借地し馬鈴薯の栽培を行った。この浅井の現金借地を皮切りに多くの愛知県出身者が現金借地を行うようになった。

愛知県出身者の農業における発展の経緯を示したのが、表1の「愛知県出身者の耕地面積の推移」である。1904年に愛知県出身者で土地を所有している者はないが、自立した農園経営者(1人が経営する場合もあるが、2～3人で共同経営する場合もある)が39戸ある。年を重ねるごとに農園経営者数が増加し、1905年には土地所有者も出現するようになる。

表1 愛知県出身者の耕地面積の推移  
(単位：エーカー)

| 年代   | 土地所有   | 現金借地   | 収穫分配  | 合計      | 農場数 |
|------|--------|--------|-------|---------|-----|
| 1904 | 0      | 1,781  | 2,276 | 4,057   | 39  |
| 1905 | 7      | 2,771  | 4,539 | 7,317   | 69  |
| 1906 | 7      | 3,013  | 3,920 | 6,940   | 73  |
| 1907 | 122    | 3,149½ | 5,419 | 8,690½  | 85  |
| 1908 | 428    | 4,621  | 5,339 | 10,388  | 126 |
| 1909 | 83     | 5,447  | 4,869 | 10,399  | 119 |
| 1910 | 332    | 5,798  | 5,052 | 11,182  | 119 |
| 1911 | 265½   | 8,756  | 5,010 | 14,031½ | 147 |
| 1912 | 559½   | 11,238 | 4,755 | 16,552½ | 258 |
| 1913 | 1,054½ | 12,213 | 5,110 | 18,377½ | 259 |
| 1914 | 659½   | 15,439 | 5,075 | 21,173½ | 303 |

北米愛知県人会編『北米愛知県人誌』pp.222～344より作成

耕地面積の比率は、1900年代当初は資金をさほど必要としない収穫分配が、現金借地に比較して多くなっているが、1909年以降になると、現金借地が多くなる。年を重ねるごとに、農場数や総耕地面積は増加の一途をたどるが、収穫分配面積はさほど増加しておらず、増加した分は現金借地と土地所有の面積である。このことは、徐々に資金力をつけて、より収益性の高い現金借地による農場経営へと展開していったことを物語っている。現金借地による農場経営においては、必要な農具・農耕馬・家屋など一切経営者が調べなければならない。したがって、愛知県から移民した人は、一介の農業労働者から短期間にある程度の資金を蓄えて、自立した農場経営者として成長していった人が多いと考えられる。

短期間に急成長できた要因として、愛知から北米のサクラメント平原に移民した大部分の人が海部・津島地域出身者、つまり郷里を同じくする人達であった。海部・津島地域は、河下地域と同じくデルタ地帯で村の周囲が堤防に囲まれた輪中地帯であり、絶えず水害や水不足に悩まされ続けてきた地域である。しかし、このことは、一方において水害や水不足といった水との闘いに対して輪中気質と呼ばれる連帯意識が強く、また真宗門徒の多い地域で、お講組の組織により精神的な結びつきの強い土地柄である。移民の多くは親族ネットワークや同郷人の呼

び寄せで渡った人が多い。移民先においても、同郷人としての結束はかたく、新参の移民に対しては、同郷出身で古参のボス的存在である農場主がよく面倒を見た。また、親族や同郷人同士数人から多いときには10人程でクミを形成して農業に従事し、共同出資で農地を現金借地して徐々に農業労働者から農場主へと成長していった。

さらに、海部・津島地域は低湿地域で、明治・大正期ごろまで農業に際して田舟や田下駄を使用し、また麦や綿などの裏作に欠かせないクネタ作り（高畝作り）は極めて重労働であったが、その収益は低かった。この木曾三川のデルタ地帯と同じような景観を呈する河下地域での農業は、日本の農業労働に比べて作業は随分楽でしかもその労働賃金は日本の6、7倍にもなり、勤労意欲旺盛な農村出身の若者は、額に汗して労働に勤しみ、短期間にまとまった金を手にして、郷里に送金したり、アメリカでの労働が有望であるという近況を肉親に報告した。

海部・津島地域ではアメリカへの出稼ぎ移民が一つのブームとなり、北米移民のほとんどが同郷人の先発隊を頼りにサクラメント平原一帯に集まり、白人や中国人が経営する河下地域の農園で農業季節労働者として働いた。

表2に示したように、佐織町見越出身のSは、1900年に17歳で渡米し、すでに渡米していた同郷のYと2人でブランケ担ぎをしたり、アスパラ栽培会社に就労したり、請負耕作をして資本を蓄え、その後同郷のMらと3人の共同で広大な面積の農地を現金借地し農場経営者となって、トマト・豆類・ネギなどをウォーナ

表2 佐織町見越出身S（1883年生、1900年渡米）の歩み

| 年代   | 就労場所         | 耕作面積    | 耕作物    | 備考           |
|------|--------------|---------|--------|--------------|
| 1900 | ホーランド島       |         | ハップス   | 同郷のYと共同      |
| 1901 | ボーマン・アスパラ会社  |         | アスパラ   |              |
| 1903 | ブラダフォード島(12) | 300エーカー | 豆・玉葱   | 請負耕作         |
| 1904 | ウエスト島(13)    | 25エーカー  | 野菜     | 現地借地         |
| 1907 | シャーマン島(11)   | 105エーカー | トマト・馬鈴 | 現地借地・同郷のMら3人 |
| 1908 | シャーマン島(11)   | 250エーカー | トマト    | 現地借地・同郷のMら3人 |
| 1909 | フランクス島(2)    | 200エーカー | 豆・玉葱   | 現地借地・同郷のMら5人 |
| 1911 | グランド島(4)     | 200エーカー | 葱      | 現地借地・同郷のMと2人 |
| 1913 | ヴォーデン島(10)   | 300エーカー | 豆      | 現地借地・同郷のMら3人 |
| 1914 | ホーランド島(16)   | 310エーカー | 豆・馬鈴薯  | 現地借地・同郷のKら4人 |

佐織町中央公民館所蔵文書「海外渡航願」より作成。就労場所の番号は本稿図1に対応。

ツグロブ近郊の農場で栽培した。やがて、Sは一時帰郷して妻を娶り、妻を伴って再び渡米して農場主として活躍した。

#### IV. 日本町の形成

ウォーナツグロブの日本人移民の推移について、表3によれば、1900年には日本人移民は295人で全体（2607人）の11.3%であったが、1910年には530人で全体の51.7%に急増している。大幅に減少したのは白人や中国人である。中国人は1882年の中国人排斥法により、アメリカへの移民ができなくなり徐々に減少していった。この中国人にかわる新たな労働の担い手として日本人労働者が必要となった。

日本人労働者の増加は、形成期の日系社会に新たな波及効果をもたらすこととなり、日本人相手の旅館や日用雑貨などを扱う商店が増加した。表4によれば、1900年において商業経営に携わる者は12人であったのが、1910年になると34人に増加し商店街を形成するにいたった。

表3 ウォーナツグロブの人口統計

|     | 1900年 | 1910年 |
|-----|-------|-------|
| 白人  | 1,168 | 695   |
| 中国人 | 1,142 | 416   |
| 日本人 | 295   | 530   |
| その他 | 2     | 32    |
| 計   | 2,607 | 1,673 |

東栄一郎「黎明期の在来日本人労働者」『移住研究』(32)のp.49より引用

表4 ウォーナツグロブの日本人職業別統計

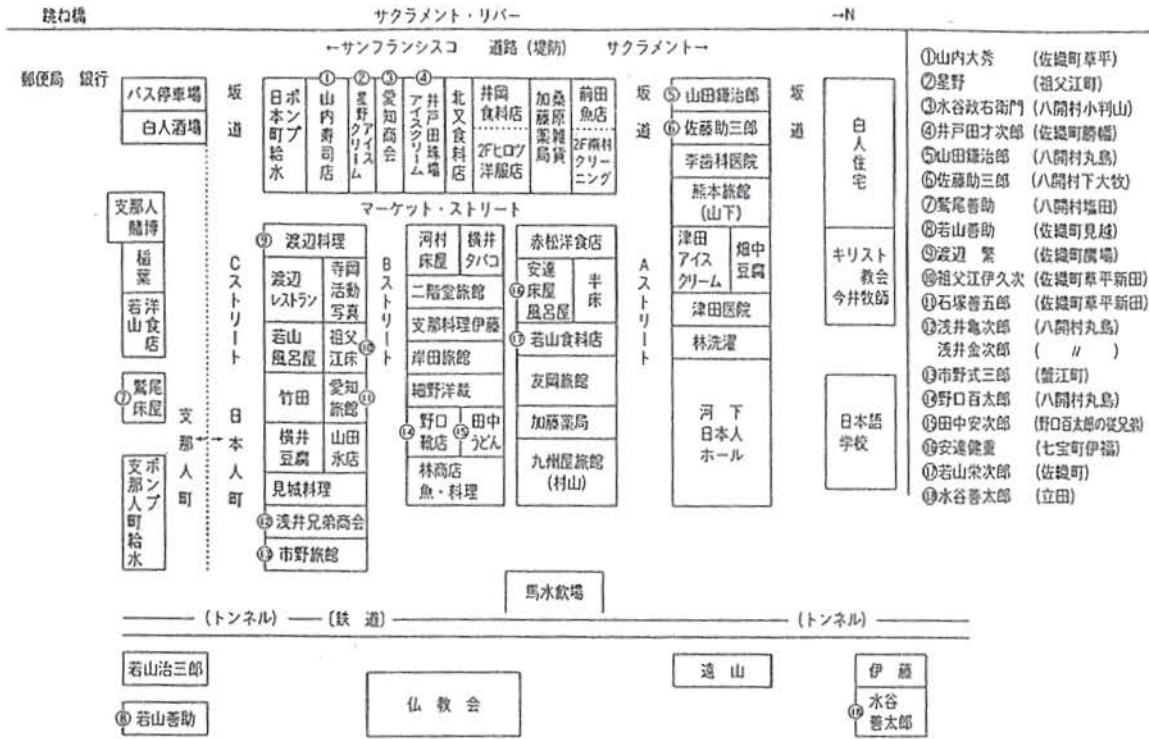
|      | 1900年 | 1910年 |
|------|-------|-------|
| 労働者  | 247   | 382   |
| 農民   | 20    | 20    |
| 商業関係 | 12    | 34    |
| その他  | 16    | 94    |
| 計    | 295   | 530   |

出典：表3参照

図2は、1910年代後半におけるウォーナツグロブの町並みを示したものである。この町並の特徴は、30余りの商店のなかで旅館が7軒、床屋が4軒見もみられるところにある。旅館は一時13軒が営業をしていた。それだけの利用客がいたのである。ウォーナツグロブは野菜や果実栽培の盛んな地域である。アスパラ



図2 ウォーナツグローブの街並み(1910年代後半)



ガス・果実・タマネギ・人参・トマト・イチゴ・ビーンズなどが栽培され、収穫期になると一時に多数の労働者を必要とした。この農業季節労働者を相手とした旅館・風呂屋・床屋・日用雑貨店などが軒を並べていた。

先述したとおり、各地の農場を渡り歩くブランケ担ぎと農場経営者との間にたって雇用先を斡旋したのは旅館であった。労働者を必要とする農民は、まず旅館経営者にその旨を伝え、仕事を探し求める移民は旅館に宿泊することで、その情報を得ることができた。つまり、ウォーナツグローブの日本人旅館は、移民にとってはデルタ地域労働市場への入口であり、農民にとっては労働力確保のための窓口であった(註8)。

1907年、約30名の商店経営者らが「ウォーナツグローブ協議会」を設立した。また、翌1908年には、農場経営者約80戸で「河下農業同盟会」を結成し、初代会長には堀田鎌次郎(佐織)が就任した。ウォーナツグローブではアスパラガスの栽培の全盛期にあり、一気に大金を手にする農家も現れ、これが風紀を乱すものともなっていた。河下農業同盟会の役員らは、風紀を粛清するために支那賭博撲滅を同盟会の評議員会に提案し、一同の賛成を得てサクラメント郡当局にその決

議書を掲出して、一時支那賭博場は閉鎖されるに及んだ。前年に結成された「ウォーナッググローブ協議会」と「河下農業同盟会」は互いに反目しあっていたが、1910年に合併して「河下日本人会」を結成した。会長には浅井亀次郎（八開）、堀田鎌次郎・石塚国三郎（佐織）らが歴任している<sup>(注9)</sup>。

1915年、河下日本人メソヂスト教会が設立され、今井敬一牧師の伝導によりウォーナッググローブ在住日本人が多数信者となった。教会はその後2度にわたる火災に遭ったが、そのたびに再建され日本人信者の平安の場となった。しかし、建物が老朽化し、またウォーナッググローブの人口が減少したため取り壊されることとなり、1998年12月、建物内にあった調度品の一部が sacrament 愛知県人会の仲介によりウォーナッググローブに大勢の移民を送り出した海部郡佐織町に寄贈されて保存されることとなった。

1898年、サンフランシスコ在住の日本人移民が中心となって西本願寺に開教使派遣を懇請し、1899年西本願寺は藺田宗恵・西島覚了の2人を派遣し、ここに日本仏教の本格的な伝道が始まった<sup>(注10)</sup>。やがて日本人移民が多く居住する都市を中心に仏教会が設立され、今日西本願寺派の仏教会は60を数えるに至っている。

ウォーナッググローブでは、1931年に仏教会が設立された。その設立の趣意は「我がウォーナッググローブを中心とする在米同胞の社会が開けて以来、数十年の月日を閲し次第に膨脹し、同胞社会生活の機関は次第に備はり、年とともに発展し来たったのであります。茲に於て社会の地盤たる仏教会を建立し、同胞社会の安定を願ふ」ところにあった<sup>(注11)</sup>。

1930年代は、言わば移民1世の時代から2世の時代へと世代交代の時期にあたっていた。このような時代背景のもとで、1世にとって次世代を担う2世に対する教育が大きな問題となってきた。一般的な教育は学校においてなされるが、元来仏教徒である日本人は白人中心の社会にあって、心の教育を施す場がなかった。1世たちにとって連綿と育んできた精神文化としての仏教を次世代に継承することは急務であった。それは、各自の幸福追求につながり、日系社会の安定、さらには異国において永住心を養うことにもなり、崇高なる精神をもつことが、白人中心の社会においてその面目を立てることにもなった。

ウォーナッググローブ仏教会は、河下地域日系人社会において、精神的な心の拠

り所となり、冠婚葬祭は言うに及ばず様々な役割を担って今日に至っている。

仏教会最大の行事は毎年7月初めに行われるチョーチ・バザーである。バザーの日には名物の照り焼きチキンをはじめ寿司など日本食、その他いろいろなものが格安の値段で販売され、遠方からも多数の人が訪れ、またウォーナツグローブ出身の人々が各地から里帰りする。盆踊りも盛大に行われている。仏教会の運営は、会員の年会費（年間100ドル）とバザーの収益金によって賄われている。

日本人移民が増加し、定着して家族を形成し子供が産まれると、その教育が問題となってきた。アメリカで生まれた日本人子女はアメリカ市民であり、アメリカの教育（英語による教育）を受ける義務を負った。両親の母語である日本語教育を受ける機会が無く、日本語教育が切実な問題となってきた。

1902年にワシントン州シアトルにおいて最初の日本語学校であるシアトル国語学校が開校され、その後各地に日本語学校が設立された。ウォーナツグローブでは、1913年河下日本人会の総会に際して日本語学校の設立案が承認され、同年4月「河下学園」が開校され<sup>(注12)</sup>、エレメンタリー・スクールでの授業が終わった後、河下学園で日本語教育が行われた。

1895年山田芳男が愛知倶楽部の結成を試みた。しかし、同年妻のコトが腸チフスにより死去し幼子二人を抱えた山田は一時帰国を余儀なくされ、同倶楽部結成の夢を断念するに至った。しかし、その志は同郷人によって受け継がれ、1897年、同郷人の連帯と相互扶助を目的としてサクラメントにおいて浅井健次郎（八開）を幹事として愛知倶楽部が結成された。1900年には会員数500名を越え、1912年に北米愛知県人会と改称し、本部がサクラメントに置かれ、ウォーナツグローブにはその支部が置かれた<sup>(注13)</sup>。

## V. 日本人町の崩壊

1941年12月7日（日本時間で8日朝）、日本軍によるハワイの真珠湾攻撃により太平洋戦争が勃発すると、翌1942年2月、アメリカ大統領ルーズヴェルトは日本人及び日系人に対して強制収容を可能にする大統領行政命令9066号を発した。この命令により太平洋岸に住む日本人及び日系人12万人が10カ所の強制収容所に

隔離収容されることとなった。ウォーナツグローブでは1942年5月28日に強制立ち退きが発令された。日系人たちは家財道具一切を二束三文の価格で売却し、オリエント小学校の前に集合した。ここから汽車でマセド（ウォーナツグローブの南約94マイル）に向かった。マセドにはアッセンブリ・センターとよばれる仮設の集合所があり、ここで約3ヵ月間滞在したのち、各地の強制収容所へ転送されていった。ウォーナツグローブに居を構えていた全ての日本人・日系人は立ち退きを余儀なくされ、ウォーナツグローブの日本人町は完全に崩壊してしまった<sup>(注14)</sup>。

終戦後、強制収容されていた日本人や日系人は解放された。しかし、殆どの方が生活基盤を失っており、しばらくの間日系社会は混乱をきわめた。ウォーナツグローブにかつて住んでいた人の多くは、サクラメントやサンフランシスコ、サンマテオなどの都市部において再出発を始めた。しかし、一部の日系人たちはウォーナツグローブに戻って、農業に従事しながら、1970年デルタ・エステート組合を結成し、地主のブラウン氏より一部の区画を協同で購入して日系人だけの住宅区域を持つに至り、ここに海外でただ一か所しかない日本人・日系人だけの町が形成され、今日に至っている。

## おわりに

かつて、北米の愛知村と呼ばれたウォーナツグローブは、戦時中の強制収容により崩壊した。戦後この町に戻る日本人は少なく、現在日系人の世帯数は26戸、いずれも高齢者世帯で、このうち愛知に縁のある家は僅か3戸である。かつて数百人の愛知出身の移民たちで賑わいをみせた北米の愛知村ウォーナツグローブはいまや歴史上の村になりつつある。

北米移民を多く送り出した愛知県西部の海部・津島地域においても、明治・大正期の北米移民について人々の記憶から消えつつある。また、移民を送り出した郷里の縁者も、その世代交代により記憶が薄らぎ、音信も途絶えがちとなっている。

移民を送り出した地域、そしてその移民が定着した地域、その間にはデルタ地

帯という地理的共通点が見られた。ウォーナツグローブの景観は海部・津島からの北米移民にとって、異郷ではなくむしろ郷里を想起させ、また夢や希望を実現させる母なる大地であるはずであった。しかし、国家と国家の利害対立が渦巻く中で、彼らの夢は露と消えた。戦後、彼らは辛辣なる境遇にも負けず見事に立ち直り、多民族・多文化社会アメリカにおいて、確固たる地歩を築いてきた。

北米の日系社会は、3世・4世の時代を迎え、日本語を理解できる人はほとんどいない。また、インターマリッジが進む中で、日系人という意識すら薄れつつある。彼らの歩んできた道程を、その記憶が風化する前に記録に留めておくことは急務であると考ええる。

## 注

- (1) 「愛知北米移民の研究(Ⅰ)」『名古屋大学人文科学研究』第30号所収 2001. 3
- (2) Eiichiro Azuma *Walnut Grove: Japanese Farm Community in the Sacramento River Delta* 1992 p.8
- (3) 在米日本人会編『在米日本人史』1940年 p.793
- (4) 愛知県人会編『北米愛知県人誌』1920年 p.199
- (5) 前掲『北米愛知県人誌』1920年 p.201
- (6) 前掲 *Walnut Grove: Japanese Farm Community in the Sacramento River Delta* 1992 pp.25-29
- (7) 櫻府日報社『櫻面都平原日本人大勢一覽』第二号 1909年 p.44
- (8) 東栄一郎「黎明期の在米日本人労働者」『移住研究』No.32 1995年 p.51
- (9) 前掲『在米日本人史』1940年 p.795
- (10) 常光浩然『北米仏教史話』1973年 p.62以下
- (11) 「河下仏教會堂建立趣意書」1931年
- (12) 前掲『在米日本人史』1940年 p.797
- (13) 拙著「愛知の北米移民」八開村史編さん委員会編『八開村史本文編』2000年 p.273
- (14) ウォーナツグローブ在住の石塚タカ(八開村出身)、およびその長女ユリコ・イシヅカへのインタビューによる。

(つつい ただし 文化人類学)